

YMCA

大阪青年



月刊 The YMCA 付録

編集・発行 / 日本 YMCA 同盟 東京都新宿区本塩町7番地

大阪青年 発行: 末岡祥弘 編集: 大阪 YMCA 広報室

〒550-0001 大阪市西区土佐堀 1-5-6

TEL06-6441-0894 FAX06-6445-0297

URL: http://www.osakaymca.or.jp/

(年10回発行) 1947年10月27日 第3種郵便物認可

大阪YMCAの使命

大阪YMCAは、聖書に示されたイエス・キリストの愛と奉仕の生き方に学び、YMCAの世界的な運動に連なり、希望を持って、共に生きる社会の実現をめざします。

- ボランティア精神をはぐくみ、互いに協力し、明るくあたたかい地域社会の形成に努めます。
- すべての世代の人びとが、出会いと生きがいを見いだすための、生涯にわたる気づきと学びの活動を展開します。
- 未来を築く力強い子どもたちを、家庭、地域社会と共に育てます。
- 生命を尊重する心を養い、自然と人間が調和する働きをすすめます。
- 世界の人びとと力を合わせ、環境、人権、貧困の課題に取り組み平和で公正な世界をめざします。

青少年における野外活動の意義

「キャンプの教育力」——子どもが輝くとき——

日本キャンプ協会 名誉会長
 頌栄保育学院 院長・理事長
 元大阪YMCA副総主事

酒井 哲雄
さかい てつお

大阪YMCAは1920年(大正9年)に日本で最初の青少年の組織キャンプを開設したことを記念して、1971年(昭和46年)2月に斯界の指導者を招いて「21世紀に向けての日本のキャンプを考える」を主題とする円卓会議を開催しました。その席上、元文部大臣であった永井道雄先生は「キャンプは第3の教育である」と強調した上で、YMCAキャンプの在り様とその持つ教育力を高く称揚されました。YMCAが持つ基本

理念である全人教育のもとに、青少年を自然の中の諸活動、特に体験活動によって、健やかな心と体を育む総合的な人間教育として展開してきたものであります。このことに対する先生の鋭い洞察と評価と受けとめました。

その後、大阪YMCAはその円卓会議のメッセージを受け、キャンプの展開を海洋は阿南国際海洋センターに、また今後考えられる環境教育のためのより広い活動空間を求めて260万㎡の呼び高センターを新たに追加、従来の六甲キャンプと共にキャンプの充実を努めて来ま

した。YMCAのキャンプは、「自然に帰れ」「自然の中に戻った人間は皆平等になり、お互いのことを理解し合い、助け合い、幸せに暮らせる」と提唱した、18世紀の哲学者ジャン・ジャック・ルソーに学ぶ処が多く、また具体的なプログラムの中では、「人間の成長は自然と環境との復交流によって促される」「なすことを通じて学ぶ」とするジョン・デューイの実践的教育哲学の手法に学び、キャンプの運営は小集団活動が中心でキャンパーの自立

自主が第一義的に尊重されるものであります。来年度から実施される文科省の、「未来を切り拓く教育の振興のため」の初等中等教育の学習指導要領の中では、「豊かな心と健やかな体の育成、社会性や豊かな人間を育むためには、成長段階に応じて自然の中での長期宿泊活動など様々な体験活動を行うことが極めて有意義である」との施策をあげています。このことは野外での長期宿泊活動の仕組みとかプログラム展開にしても、キャンパー本位、プロセス重視のYMCAキャンプとは軌を一にしているように考えにくいようですが、文科省が体験活動を重要視していることは評価できると思っています。

そこでYMCA側の再検討、再構築です。それは理屈無しにこれまでのキャンプの在り様にプラスして野生的教育キャンプの提唱を訴えたいのです。やがて青少年が遭遇するであろう困難な事態や時代の激変に対しても、耐性な根性は、YMCAキャンプの総合的、包括的な野生的キャンプで生まれることを確信し、従来にも増してキャンプの教育力を発揮し、さらなる推進を図りたいと願います。

地の塩

▼世界的な金融混乱による不況により、日本でも社会的弱者などに大きな影響が出ていますが、このしわ寄せが大阪YMCAの活動に波及するのではないよう祈るばかりです

▼大阪YMCAも、公益法人制度改革のための新しい法律の制定に則り、「公益財団法人」の認定を目指して鋭意作業を進めています。この認可条件の一つに事業の「公益性」があり、これからのYMCA運動にもなっています▼アメリカのオバマ大統領も、就任に際して「チェンジ(変革)」を大きく掲げています

▼俳人松尾芭蕉の文章に「不易流行」という言葉がありますが、不易とは、時代を超越して不変なるもの、流行とは、その時々に応じて変化していくものを意味しています。両者は本質的に対立するものではなく、真に流行を得ればおのずから不易を生じ、また、真に不易に徹すれば、そのまま流行を生ずるものだと考えられています。不易と流行の根本は一つのものなのであります▼百三十年の歴史を辿ろうとしている日本のYMCAも、その時代に対応した変革を続けていかなければなりません。しかし、その中にあるとしても、変えてはならないもの(不易、時代を超越して不変なもの)の存在をしっかりと認識し、守っていくことを忘れてはなりません▼また、YMCAに集う多くの人たちは、当然のことながら職業や経歴、年齢の違う多様な人たちの集団であります。しかし、この多様性(ダイバーシティ)が貴重であり、宗教、価値観、信条、学歴などの違いを超えた「多様性の中の一一致」を目指してYMCA運動を活性化させていかなければなりません▼様々な意見や考えのあるこの多様性の集団の中にこそYMCAの活性化があるのではないのでしょうか。

(和)



阿南国際海洋センターにて